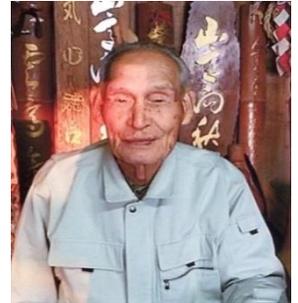


白 寿

おめでとうございます



白寿を迎えた相羽さん

学園花の村の創設者故宮城正雄さんの依頼で、会

員の農業指導にあたられた相羽春一さんは大正6年3月9日生まれ、今年白寿を迎えられました。10年前「花の村だより」に1年に渡って掲載された相羽さん訪問ルポ「私と農業」には『布マルチ研究会の配布資料に「農業青年」と自己紹介した』とあります。今回は白寿を迎えてなお、田4反5畝、畑1反7畝を耕す元氣な「農業青年相羽春一さん」を小関、藤本、松井の諸兄と共に訪問、近況をお伺いいたしました。

伊藤公博 記

朝の柔軟体操 相羽流味噌汁

相羽さんの朝は5時半起床から始まる。先ずは柔軟体操。背伸び、腹筋運動、肩のマッサージなど。仰向けに寝た姿勢から起き上がる体操や、両手を地面につける柔軟体操、足、腰、肩、首筋とそれぞれ8回やる。実は2年前突然足が動かぬようになった。二百歩ぐらいしか歩けない。これを直そうと柔軟体操と朝の散歩を組み合わせた。柔軟体操を終ると今日はどこまで

と歩く目標を定めての散歩、六か月かかって今までとおり歩けるようになり、これが新しい日課となった。日課といえれば何十年と変わらぬものがある。朝食のメニューに欠かせぬ味噌汁、これが尋常ではない。畑で採れたものを中心に手当たり次第にみそ汁の具とする。ごった煮だ。これはもう何十年と続いて相羽さんの農作業のエネルギーになっている。

「バーさんが作るものよりうまいかもしれない」という相羽さんは淋しい。昨年末、最愛の伴侶、さわさんが逝去された。92歳だった。夢に出てこないと恨む。毎朝の般若心経の読経が新しく日課に加わっている。この「ごった煮味噌汁」は昼飯にもそのまま顔を出す。

今年の農作業計画を支えるカレンダー

相羽さんの家の作業場の壁には大きな今年のカレンダーが掛かっている。相羽さんは仕事が終わるとこのカレンダーに今日やったことを丁寧に書き込む。変わっているのはその横に昨年と一昨年の同月のカレンダーが並んで掛けられていること。去年とおとしの明日、何をやったか。カレンダーの記録を見て明日の仕事計画する。

一日の仕事は四時に終わる。テレビの水戸黄門が始まると、熱燗一合と炒り豆や煮干しを齧りながらのテレビ鑑賞。硬い歯触りが気に入っている。歯が丈夫なのはありがたい。80歳のこ

ろは20本あった。今は15本。至福のひと時だ。それから食事、6時ごろだ。肉や魚を交えたものを食べる。一口放り込むと50回は必ず咀嚼する。メシは1膳、若いころは1日4食、日に20杯は食べたものだ。夕食が済むと風呂。ソーラーシステムの風呂だが、湯船の湯は膝の半分、首までたつぷりつかる老人もいるだが、風呂場で遭遇する事故をよく耳にするからだ。8時に就寝。これが相羽さんの日常だ。

生まれ変わってもやはり農業

相羽さんは言う。私はこれまで好きだと思ふことをやってきた。子供の時からそうだった。学校の成績は全丙だったが全然気にならなかった。手先が器用だったから図工ぐらいは乙だったかもしれない。でも村の鍛冶屋の仕事は面白くて一日中見ていた。二人が槌をふるうのが、師匠がここを打てと小さい槌で合図する、それをくみ取って弟子が大槌をふるう。力を加減するのも師匠の小槌だと分かった。これが近衛兵として徴兵された時に役立った。連隊一の「蹄鉄工」として賞された。農業は自分の好きなことができる。やらなければと頑張るのでは長続きしないし、楽しくない。どうしたらもう少しよくなるだろうかと考えることが楽しい。し、良い結果が出ればうれしくてたまらない。農業はそういうことをやらせてくれる。生まれ変わってもやはり百姓を選ぶだろう。